

「生きがい」の構造

- 「生きがい」の対象と伴う感情の共分散構造分析 -

金沢工業大学心理科学研究所

長谷川明弘

東京都老人総合研究所地域保健グループ

藤原 佳典

東京都立大学大学院都市科学研究科

星 旦二

はじめに

高齢社会を迎え、延命だけではなく、生活の質(Quality of Life; QOL)を高める意義が注目されている。わが国では、「生きがい」が、このQOLに相当する言葉として以前から活用されている。欧米から導入されたQOLの尺度は、当初は専門家による客観的な側面を重視する傾向が見られたが、近年個々人の主観的な側面へと評価の重点が移っている¹⁾。一方、わが国で古来から語られてきた「生きがい」²⁾は、これら欧米を中心に発展してきたQOLという概念とはやや異なり、専門家間でも、その定義が一致していないのが現状である¹⁾。それにもかかわらず、自治体を中心として、「生きがいづくり」事業が高齢者対象の事業名にしばしば標榜される³⁾ことが多くなり、高齢者施策においては「生きがい」がかなり定着しつつある概念になっている。

海外では「生きがい」に相当する言葉はない⁴⁾ものの、QOLを議論する中で「生きがい」と類似の概念^{5,6)}として主観的幸福感(Subjective Well-being)⁷⁾について研究が進められてきた。また国内においても主観的幸福感⁷⁾に関する研究がなされ、海外の主観的幸福感⁷⁾と同様の因子構造を持っていることが国内で確認されている^{5,6)}。

本研究では、主観的幸福感⁷⁾を広義の「生きがい」の概念に含めて論じるが、主観的幸福感⁷⁾と比べて「生きがい」そのものの因子構造を検討した研究^{8,9)}は、ほとんど報告されていないのが現状である¹⁰⁾。

著者ら¹⁰⁾は、「生きがい」に関する先行研究を総括し報告した。それを基に「生きがい」の構造についてモデル化して図示したのが図1である。著者らが概念整理した「生きがい」とは、自己あるいは主体が今ここで実感している「生きがい」感^{8,9)}、「生きがい」意識^{11,12)}、あるいは「生きがい」の対象に伴う感情¹⁰⁾と呼ばれる「生きがい」を感じている精神状態⁴⁾と、それらが生じてくる「生きがい」の対象^{4,10)}もしくは「生きがい」の源泉⁴⁾との総和あるいは相乗の結果とした^{4,5)}。

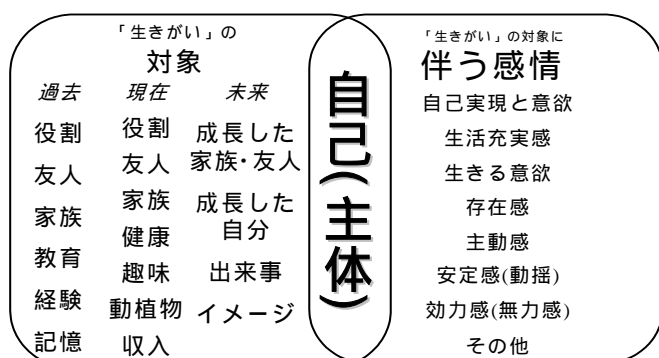


図1 「生きがい」の構造
(長谷川ら,2001を一部改変)

「生きがい」の対象に伴う感情¹⁰⁾については、主観的幸福感⁷⁾の尺度を活用して古谷野¹³⁾が14項目から構成される「生活満足度尺度 K(Life Satisfacton Index K:LSIK)」を作成したり、一方で近藤ら⁸⁾、鎌田ら⁹⁾が「高齢者の生きがい感スケール(K-1式)」を「生きがい」そのものを測定する目的で開発ならびに標準化を試みている。しかし現状では「生きがい」の対象に伴う感情¹⁰⁾と「生きがい」の対象¹⁰⁾との関係という「生きがい」そのものの構造が実証的に明らかになって

おらず、検討の余地が残っている¹⁰⁾。

本研究の目的は、在宅高齢者の「生きがい」の構造を実証的に明確にすることである。本研究の意義は、「生きがい」の構造を明らかにすることで自治体の高齢者施策で取り上げられている「生きがいづくり」事業³⁾に役立てられる資料を提供するだけでなく医療福祉保健領域の実践に役立つデータを提供することと、同時に今後の「生きがい」そのものの研究につながる基礎資料を得ることにある。

方法

1. 対象

調査対象者は、2002年3月31日現在の人口を基に佐賀県H町に在住する65歳以上の全高齢者1,498名とした。H町は佐賀県の南東部の海岸に面した人口7,653人(男:3,642人;女:4,011人)、世帯数2,104、高齢者人口割合19.3%の町で、農業と漁業が盛んな地域である。調査票は留め置きによる形式で回収された。調査期間は、2001年12月1日から12月20日であった。調査の結果1,354名(男:545人;女:809人)から回答が得られた(応答率90.4%)。

2. 調査・分析項目

「生きがい」を感じる程度について、『「生きがい」になる』から、『どちらかといえば「生きがい」になる』、『あまり「生きがい」にならない』、『まったく「生きがい」にならない』までの4件法で尋ねた。質問項目で用いられた「生きがい」の内容は、先行研究¹⁰⁾を参考にし著者らで協議して決定された。具体的には1)働くこと、2)学習や教養を高めるための活動、3)スポーツやレクリエーション活動、4)趣味の活動、5)ボランティア活動、6)老人クラブ活動、7)近所の人や友人、知人とのつきあい、8)孫の世話や家族との団らん、9)買い物や旅行に出かけること、10)自治会などの活動、11)これまで蓄えてきた知識や技術、12)配偶者、13)子ども、14)孫、15)健康、16)ペット、17)家庭での役割、18)社会での役割、19)その他の19項目であった。

なお調査時には、「生きがい」の程度の他に今後「生きがい」にしてみたいかと尋ねているが、その検討は他の機会に行う。それ以外の主たる質問項目は大きく、基本属性(6項目)、身体状況(4項目)、生活満足度(4項目)、生活機能(1項目で下位3尺度)、生活習慣(9項目)、社会活動性(4項目)のカテゴリーに分かれていた。

基本属性の6項目は、性別、年齢、同居者、収入、現在の仕事の有無、一番長かった職業であった。身体状況の4項目は、身体の痛みの部位(腰、膝、腕、足、首、肩、その他、なし)、治療中の疾病(高血圧、脳卒中、糖尿病、心臓病、肝臓病、その他、なし)、咀嚼能力、主観的健康感であった。生活機能として老研式活動能力指標(手段的自立、知的能動性、社会的役割)¹⁴⁾を尋ねた。生活満足度の4項目は、昨年と比較

表1 対象者の基本特性

変数	N=1354	カテゴリー	男(%) n=545	女(%) n=809	(² or t検定)	(クramer-V or V _{or})
基本属性						
年齢	男:545, 女:809	(歳;平均±SD)	73.4±6.6	74.9±7.0	***	0.112
		65-74歳/75歳以上	62.4/37.6	52.3/47.7	***	0.100
同居者数	男:545, 女:809	(人;平均±SD)	2.08±1.35	1.96±1.30	n.s.	0.043
収入	男:503, 女:737	300万円未満/300万円以上/答えたくない	59.2/20.9/19.9	65.6/9.8/24.6	***	0.157
現在の仕事	男:484, 女:704	なし/ある	46.9/53.1	64.1/35.9	***	0.170
一番長かった職業	男:524, 女:757	農・漁業以外/農・漁業	44.8/55.2	53.8/46.2	**	0.088
身体状況						
身体の痛み	男:545, 女:809					
全くない		痛みなし/痛みある	18.2/81.8	10.9/89.1	***	0.104
腰		なし/ある	52.3/47.7	43.4/56.6	**	0.088
膝		なし/ある	74.9/25.1	59.3/40.7	***	0.160
腕		なし/ある	84.0/16.0	84.5/15.5	n.s.	0.007
足		なし/ある	66.6/33.4	61.4/38.6	n.s.	0.053
首		なし/ある	89.7/10.3	89.1/10.9	n.s.	0.010
肩		なし/ある	73.0/27.0	67.2/32.8	*	0.062
その他の痛みの部位		なし/ある	94.3/5.7	96.5/3.5	n.s.	0.053
治療中の疾患	男:545, 女:809					
全くない		治療中なし/治療中あり	23.9/76.1	23.5/76.5	n.s.	0.004
高血圧		なし/ある	71.9/28.1	65.9/34.1	*	0.064
脳卒中		なし/ある	94.5/5.5	97.0/3.0	*	0.064
糖尿病		なし/ある	90.1/9.9	93.1/6.9	n.s.	0.054
心臓病		なし/ある	87.9/12.1	85.0/15.0	n.s.	0.040
肝臓病		なし/ある	95.8/4.2	95.3/4.7	n.s.	0.011
その他の疾患		なし/ある	73.8/26.2	78.0/22.0	*	0.049
咀嚼能力	男:536, 女:793	介助/自立	17.9/82.1	18.1/81.9	n.s.	0.013
主観的健康感	男:537, 女:795	あまり・健康ではない/非常・まあ健康である	29.2/70.8	30.3/69.7	n.s.	0.012
生活機能						
総合得点(老研式)	男:468, 女:717	(13点満点;平均±SD)	10.59±3.21	10.22±3.71	n.s.	0.050
手段的自立	男:487, 女:756	(5点満点;同上)	4.04±1.51	4.01±1.68	n.s.	0.008
知的能動性	男:510, 女:762	(4点満点;同上)	3.23±1.01	3.00±1.21	**	0.097
社会的役割	男:516, 女:769	(4点満点;同上)	3.29±1.20	3.16±1.28	n.s.	0.049
生活満足度						
昨年より元氣か	男:529, 女:795	いいえ/どちらともいえない/はい	18.5/29.1/52.4	28.2/25.4/46.4	***	0.110
今の生活は幸せか	男:529, 女:798	いいえ/どちらともいえない/はい	7.0/27.8/65.2	6.9/27.2/65.9	n.s.	0.007
小さなことにくよくよするか	男:526, 女:777	いいえ/どちらともいえない/はい	43.3/28.2/28.5	38.4/28.8/32.8	n.s.	0.054
人生を振り返って満足か	男:531, 女:791	いいえ/どちらともいえない/はい	12.4/37.9/49.7	14.7/41.0/44.3	n.s.	0.054
生活習慣						
朝食	男:534, 女:795	たべない/時々/毎日	4.3/95.7	3.0/97.0	n.s.	0.051
飲酒状況	男:530, 女:771	飲んでいない/飲む/時々飲む	50.6/49.4	97.1/2.9	***	0.554
喫煙状況	男:527, 女:770	吸わない/吸う/止めた	27.1/30.7/42.2	95.4/2.7/1.9	***	0.716
睡眠時間	男:527, 女:793	6時間以下/7から9時間未満/9時間以上	14.6/59.2/26.2	17.2/63.8/19.0	**	0.077
散歩・軽い運動	男:483, 女:703	月1回・週1回/週3, 4回・ほとんど毎日	26.9/73.1	33.0/67.0	*	0.109
地域活動・ボランティア	男:514, 女:754	しない/たまに/している	59.9/27.5/12.6	65.4/25.4/9.2	n.s.	0.065
旅行・行楽	男:526, 女:772	しない/たまに/している	33.7/54.0/12.3	32.4/53.2/14.4	n.s.	0.025
趣味	男:461, 女:691	ない/1つ/2つ以上	43.9/28.6/27.5	42.1/28.8/29.1	n.s.	0.019
ペットの世話	男:445, 女:677	しない/している	64.5/35.5	67.2/32.8	n.s.	0.028
社会活動性						
外出頻度	男:508, 女:733	月1回・週1回/週3, 4回・ほとんど毎日	34.3/65.7	43.0/57.0	**	0.088
友人・近所づきあいの頻度	男:491, 女:733	月1回・週1回/週3, 4回・ほとんど毎日	36.9/63.1	34.2/65.8	n.s.	0.027
一緒にいてほっとする人	男:496, 女:731	いない/いる	19.6/80.4	16.7/83.3	n.s.	0.037
用事やお使いをしてくれる人	男:502, 女:758	いない/いる	11.0/89.0	10.7/89.3	n.s.	0.004

n.s.: not significant ; * p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

して元気か、今の生活は幸せか、小さなことを気にするようになったか、人生を振り返って満足かを尋ねた。生活習慣の9項目は、朝食、飲酒状況、喫煙状況、睡眠時間、散歩・軽い運動の頻度、地域活動・ボランティア活動の頻度、旅行・行楽の頻度、趣味の数、ペットの世話の有無であった。外出頻度、友人・近所づきあいの頻度、一緒にいてほっとする人ならびに用事やお使いをしてくれる人の存在について程度で尋ねた4項目を社会活動性とした。

3. 生きがい構造の仮説的モデル

「生きがい」そのものの構造分析した先行研究は、見あたらなかった¹⁰⁾。そのために共分散構造分析に先立ち、変数の関係を知るためにプロマックス回転による探索的因子分析を実施した¹⁵⁾。

本研究を進めるにあたり次のように構造モデルを設定した。なお以下の本文中で直接測定できない構成概念を表す潜在変数は、『潜在変数』で示し、直接測定した観測変数は、「観測変数」と区別して記述することにする。「生きがい」の対象¹⁰⁾として具体的な内容を提示し、それらの内容に対してどの程度「生きがい」を感じているか尋ねた上で、これらの質問項目から『「生きがい」対象』を潜在変数として仮定した。また「生きがい」対象から生じると仮定され、自己(主体)¹⁰⁾が感じている『伴う感情¹⁰⁾』を潜在変数に仮定した。さらに著者らが示した自己(主体)¹⁰⁾に相当するものとして潜在変数に『年齢と生活自立』を仮定した(図2)。

変数の背後にある関係を踏まえた上で、本論文の主題となる共分散構造分析を実施した。共分散構造分析の理論^{15,16)}に基づいて、潜在変数には『「今、ここ」での「生きがい」対象』、『家族的な「生きがい」対象』、『伴う感情』、『年齢と生活自立』を設定した。潜在変数間の因果関係を論じるために、作業仮説に基づいて因果モデルを構築し、モデルの検証を実施した。モデルにおける『「今、ここ」での「生きがい」対象』という潜在変数は、「ボランティア活動」、「スポーツ・レクリエーション」、「自治会などの活動」、「学習や教養を高める活動」、「蓄えた知識や技術」、「趣味の活動」、「社会の役割」の7変数からなる。『家族的な「生きがい」対象』という潜在変数は、「配偶者」、「子ども」、「孫」、「孫の世話や家族との団らん」という4変数からなる。『伴う感情』という潜在変数は、「人生を振り返って満足か」、「昨年と比較して元気か」、「今の生活は幸せか」、「主観的健康感」の4変数からなる。『年齢と生活自立』という潜在変数は、「年齢」、「老研式活動能力指標¹⁴⁾」の下位2尺度(手段的

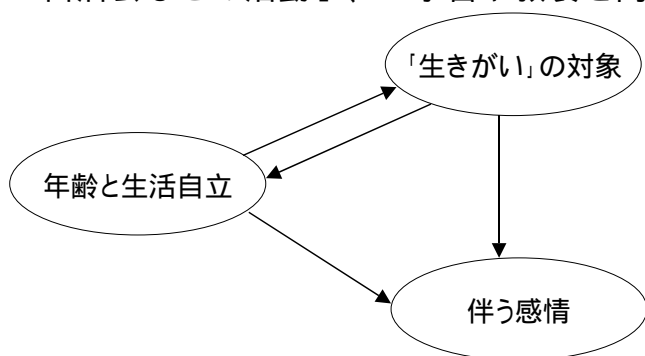


図2 「生きがい」の構造モデル

の4変数からなる。『年齢と生活自立』という潜在変数は、「年齢」、「老研式活動能力指標¹⁴⁾」の下位2尺度(手段的

自立¹⁴⁾、知的能動性¹⁴⁾の3変数からなる。

ここではモデルに投入しなかったり、投入できなかった変数について言及しておく。「生きがい」の対象になる程度で尋ねた、「働くこと」、「老人クラブ」、「友人や知人とのつきあい」、「買い物や旅行に出かけること」、「健康」、「家庭の役割」は他に投入した変数と内容が重なる点が多いのでモデルに最初から除外し、同様に「その他」は欠損値が他の項目と比べて多いため除外した。他に投入できなかった変数の中で身体の痛みの数や疾病数を合計して数値に置き換えて連続変量としてモデルに投入したが適合度指標の値がかなり低くなったので除外することにした。ペットの世話の有無、咀嚼能力の有無というカテゴリー変数は、共分散構造分析モデルへの投入が理論上できないので除外した。

4. 解析手法

各調査項目におけるカテゴリー項目の割合と性別の関連については、²検定を用いて検討した。また老研式活動能力指標とその下位尺度、同居者数について男女間の平均値の差を検討するのにt検定を用いた。ここで検定を実施したのは共分散構造分析を実施する際の関連性を明確にするためである。

統計分析には、SPSS11.0J ならびに Amos4.0 を使用した(いずれも Windows 版)。な

表2 「生きがい」の対象になる程度

変数	N	「生きがい」			χ ² (検定)	(カテゴリーの V or)	
		なる	どちらかといえ ば	あまりなら ない			
働くこと	男:260,女:351	55.9/62.8	28.5/24.4	8.5/8.3	7.1/4.5	n.s.	0.070
学習や教養を高めること	男:201,女:307	38.1/29.9	28.4/35.3	18.2/25.8	15.3/9.0	n.s.	0.015
スポーツやレクリエーション	男:213,女:292	28.1/36.6	30.8/30.5	24.7/23.5	16.4/9.4	n.s.	0.114
趣味の活動	男:199,女:318	51.2/44.2	25.2/31.2	13.5/16.6	10.1/8.0	n.s.	0.030
ボランティア	男:199,女:292	29.8/24.1	26.7/34.7	27.7/29.6	15.8/11.6	n.s.	0.004
老人クラブ	男:218,女:315	37.5/34.4	32.7/33.5	21.0/22.0	8.8/10.1	n.s.	0.033
友人や知人とのつきあい	男:249,女:409	61.1/48.2	29.6/40.6	7.1/9.2	2.2/2.0	*	0.098
孫の世話や家族との団らん	男:249,女:384	71.4/65.5	23.4/28.9	3.6/3.6	1.6/2.0	n.s.	0.051
買い物や旅行に出かけること	男:246,女:374	54.3/41.5	32.4/38.2	8.6/17.5	4.7/2.8	***	0.105
自治会での活動	男:206,女:287	21.3/22.8	28.6/37.4	34.8/29.6	15.3/10.2	n.s.	0.087
蓄えてきた知識や技術	男:216,女:301	37.6/38.5	33.2/35.6	17.6/22.2	11.6/3.7	*	0.063
配偶者	男:234,女:281	55.9/72.7	19.6/20.9	7.1/3.8	17.4/2.6	***	0.250
子ども	男:231,女:362	77.9/72.8	17.7/22.5	3.3/3.0	1.1/1.7	n.s.	0.050
孫	男:242,女:366	77.3/76.0	17.8/18.2	3.7/3.7	1.1/2.1	n.s.	0.025
健康	男:200,女:285	67.4/67.0	22.1/26.0	7.4/5.0	3.1/2.0	n.s.	0.029
ペット	男:171,女:243	24.7/19.3	20.2/25.7	28.0/30.4	27.1/24.6	n.s.	0.012
家庭での役割	男:197,女:298	58.4/54.3	29.5/30.5	8.4/12.7	3.7/2.5	n.s.	0.037
社会での役割	男:172,女:234	25.2/31.4	30.3/36.0	23.5/22.7	20.9/9.9	*	0.138
その他	男:51,女:65	33.8/17.7	18.5/29.4	24.6/29.4	23.1/23.5	n.s.	0.097

n.s.: not significant *; p<0.05, **; p<0.01, ***; p<0.001

各値について上段は女性の割合(%)
下段は男性の割合(%)

お Amos4.0 は、欠損値のデータを最尤法を用いて測定されたデータからケース毎に欠損値の推定値を決定している¹⁶⁾。

結果

1. 分析対象者の特性

各変数の性別にみた特徴を表1に示した。平均年齢は男が 73.4 ± 6.6 (S.D.)歳、女が 74.9 ± 7.0 (S.D.)歳であった。同居者数は 2 ± 1 名程度となり、男女間に有意差を認めなかった。年間所得は300万円以下が半数以上(男:59.2%;女:65.6%)を占めていたものの回答の拒否も目立った(男:19.9%;女:24.6%)。現在の仕事について、男性は半数程度があると答えている(53.1%)のに対して、女性は半数以上が持っていない(64.1%)と答えていた。また一番長い職業は、男性の半数以上(55.2%)と女性の半数近く(46.2%)が、農漁業に従事していたと回答した。

身体の痛みの有無については、ほとんど(男:81.8%;女:89.1%)が痛みを有していたが性別ないし部位別では異なった割合を示した。腰の痛みがあると回答したのは、男性(47.7%)に比べて女性(56.6%)の割合がやや高くなった。一方、膝の痛みがあると回答したのは、女性(40.7%)に比べて男性(74.9%)の割合がかなり高くなった。治療中の疾患については、男女に関係なく高い割合で治療中(男:76.1%;女:76.5%)であった。主観的健康感については、ほとんどが非常に健康、もしくはまあまあ健康であると回答していた(男:70.8%;女:69.7%)。生活機能は、男女差を認めずとも高い得点であった(男: 10.59 ± 3.21 (S.D.);女: 10.22 ± 3.71 (S.D.))。生活満足度については、昨年と比較して元気かという問いに対して、男性は、「はい」という回答が半数を超えた(52.4%)のに対して女性は半分以下(46.4%)であった。生活習慣については、男性の半数近くが飲酒(49.4%)の習慣を持ち、喫煙習慣についても男性は吸う(30.7%)や吸うのを止めた(42.2%)割合が高かったが、ほとんどの女性は喫煙習慣を持っていなかった(95.4%)。男女を問わず、散歩や軽い運動の習慣を高い割合で持っていた(男:73.1%;女:67.0%)。社会活動性についても外出頻度(男:65.7%;女:57.0%)や友人・近所づきあい(男:63.1%;女:65.8%)に高い割合で、ほとんど毎日あるいは週3・4回と回答していた。ほとんどの人が一緒にいてほっとする人(男:80.4%;女:83.3%)や用事やお使いをしてくれる人(男:89.0%;女:89.3%)を有していた。

「生きがい」の対象になる程度を性別毎にみた場合を表2に示した。「買い物や旅行に出かけること」、「友人や知人とのつきあい」について男性よりも女性が「生きがいになる」と回答する割合が段階的に高くなっていた。一方「蓄えてきた知識や技術」や「社会での役割」については女性が男性に比べて「全くなならない」と回答する割合が高くなっていた。「配偶者」について男性は「生きがい」になると回答する割合が高く(男:72.7%;女:55.9%)、反対に女性は「生きがい」に「全くなならない」という回答する割合が高かった(男:2.6%;女:17.4%)。

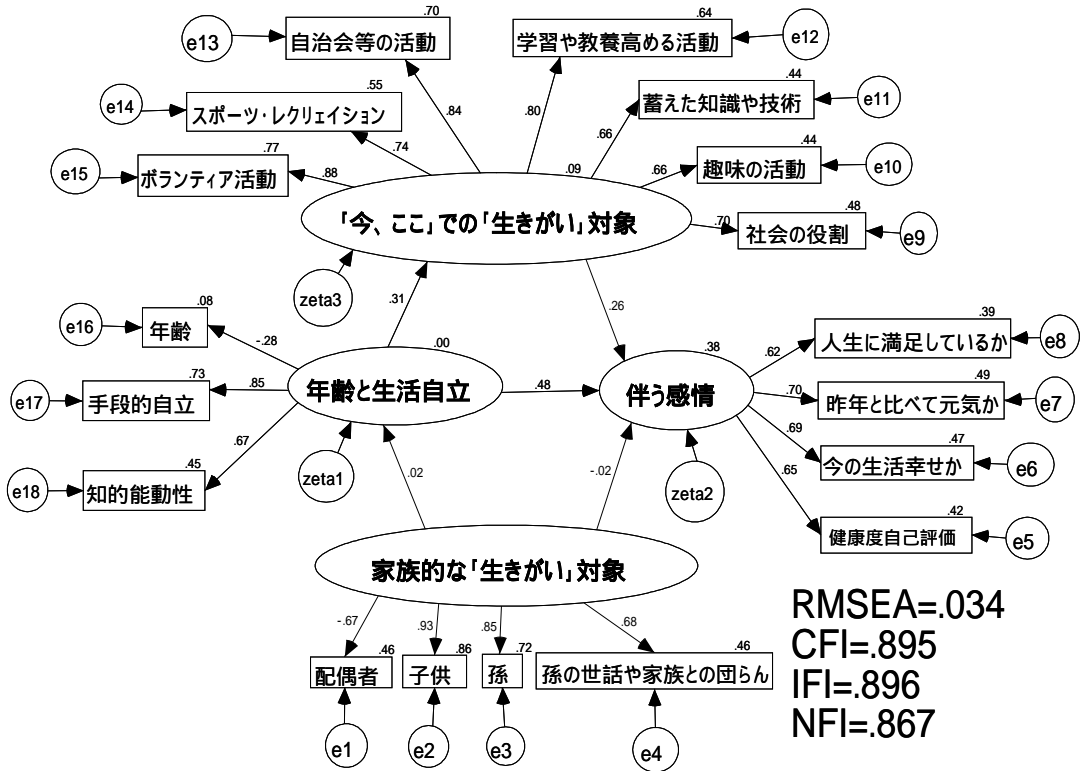


図3 「生きがい」の構造-男性

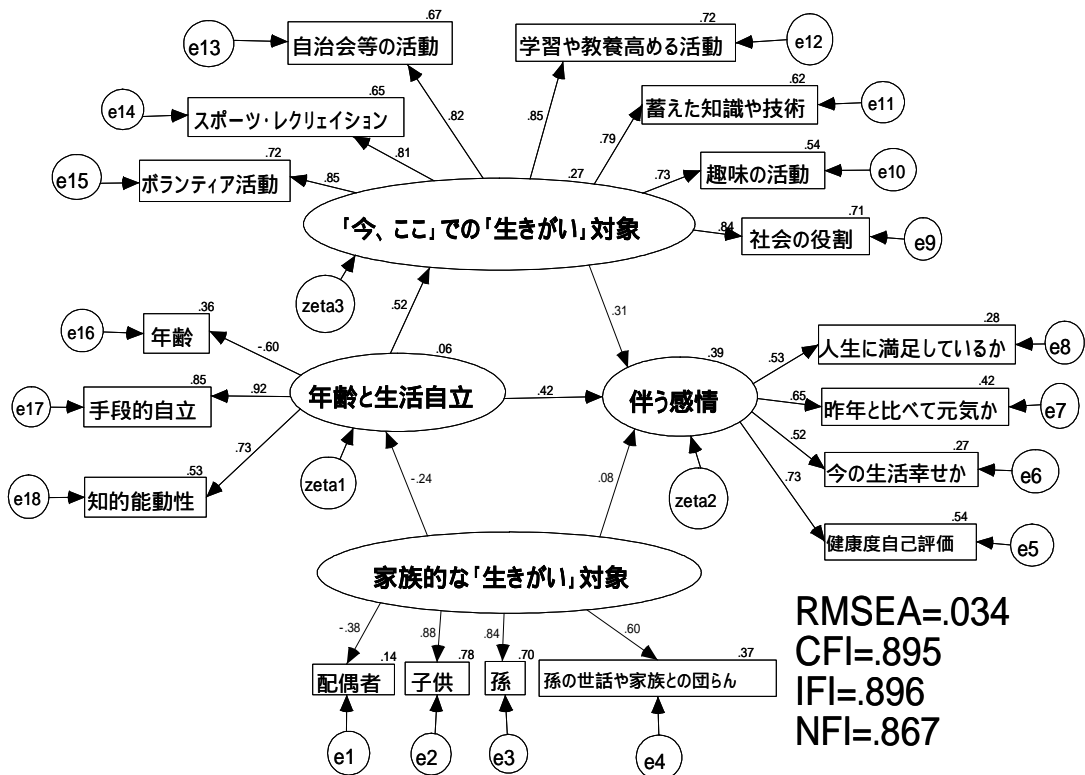


図4 「生きがい」の構造-女性

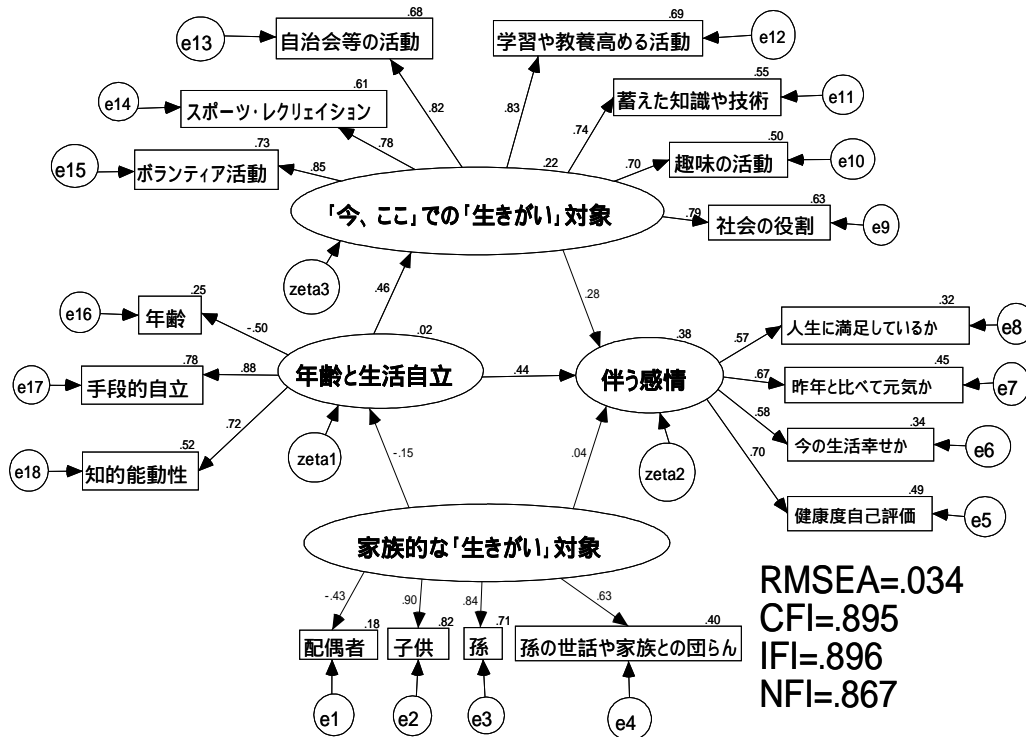


図5 「生きがい」の構造-全体

2. 「生きがい」の構造とモデルの適合度

共分散構造分析の結果は、男性、女性、全体の順に図3、図4、図5に示してあり、図中のe1～e18は誤差変数、zeta1～zeta3は攪乱変数を表している。

男性、女性、全体のいずれの結果もモデルに示されたパス係数のうち、『家族的な「生きがい」対象』から『伴う感情』へのパス係数、さらに男性にのみ『家族的な「生きがい」対象』から『年齢と生活自立』へのパス係数が5%水準で有意ではなかった。その他のパス係数はすべて5%水準で統計上有意な差がみられた。表3には、潜在変数間のパス係数の総合効果について示した。

モデルがどの程度あてはまっているのかの判定基準としての適合度は、いくつかの指標が提唱されている¹⁵⁻¹⁸⁾。本研究では、平均二乗誤差平方根(RMSEA:Root Mean Square Error of Approximation)、比較適合度指標(CFI:Comparative Fit Index)、増分適合度指標(IFI:Bollen's Incremental Fit Index)、規準化適合度指標(NFI:Bentler-Bonett Normed Fit Index)を用いた。RMSEAは値が0.05以下であればあてはまりが良く、0.1以上になるとあてはまりが悪くなるといわれている¹⁸⁾。残りのCFI、IFI、NFIは値が1に近づくほどあてはまりが良いといわれている¹⁶⁾。本モデルの適合度指標の値は、RMSEA=0.034、CFI=0.895、IFI=0.896、NFI=0.867と高い適合度が得られた。

表3 潜在変数間の総合効果

	パス	男	女	全体
年齢と生活自立	伴う感情	0.56	0.58	0.57
「今、ここ」での「生きがい」対象	伴う感情	0.26	0.31	0.28
家族的な「生きがい」対象	伴う感情	-0.01	-0.06	-0.05
年齢と生活自立	「今、ここ」での「生きがい」対象	0.31	0.52	0.46
家族的な「生きがい」対象	「今、ここ」での「生きがい」対象	0.01	-0.13	-0.07
家族的な「生きがい」対象	年齢と生活自立	0.02	-0.24	-0.15

男性

『年齢と生活自立』から『伴う感情』への直接効果は0.48となったが、『「今、ここ」での「生きがい」対象』を介して0.08という間接効果を与え、その総合効果は0.56となった。一方、『「今、ここ」での「生きがい」対象』から『伴う感情』へは0.26という直接効果を与えた。また『家族的な「生きがい」対象』から『伴う感情』への直接効果は-0.02となったが、『年齢と生活自立』を介して0.01の間接効果を与えて、その総合効果は-0.01となった。『年齢と生活自立』から『「今、ここ」での「生きがい」対象』への直接効果は0.31となった。そして『家族的な「生きがい」対象』から『「今、ここ」での「生きがい」対象』への間接効果は0.01となった。また『家族的な「生きがい」対象』から『年齢と生活自立』への直接効果は0.02となった。続いて『潜在変数』と「観測変数」のパス係数の特徴的な結果は、『年齢と生活自立』について「年齢」へは-0.28となり、老研式活動能力指標の下位尺度である「手段的自立」、「知的能動性」への順に0.85、0.67となった。『「今、ここ」での「生きがい」対象』から「ボランティア活動」へは0.88となり、「自治会などの活動」へは0.84となり、「学習や教養を高める活動」へは0.80、「スポーツ・レクリエーション」へは0.74、「社会への役割」へは0.70、「蓄えた知識や技術」ならびに「趣味の活動」へは0.66となった。『家族的な「生きがい」対象』について、「配偶者」へは-0.67、「子ども」へは0.93となり、「孫」へは0.85、「孫の世話や家族との団らん」へは0.68となった。『伴う感情』については「昨年と比較して元気か」へは0.70、「今の生活が幸せか」へは0.69となり、「主観的健康感」へは0.65、「人生を振り返って満足か」へは0.62となった。

女性

『年齢と生活自立』から『伴う感情』への直接効果は0.42となったが、『「今、ここ」での「生きがい」対象』を介して0.16という間接効果を与え、その総合効果は0.58となった。一方、『「今、ここ」での「生きがい」対象』から『伴う感情』へは0.31という直接効果を与えた。さらには『家族的な「生きがい」対象』から『伴う感情』への直接効果は0.08となったが、「年齢と生活自立」を介して-0.14の間接効果を与えて、その総合効果は-0.06となった。そして『年齢と生活自立』から『「今、ここ」での「生きがい」対象』への直接効果は0.52となった。『家族的な「生きがい」対象』から『「今、ここ」での「生きがい」対象』への間接効果は-0.13となった。また『家

族的な「生きがい」対象』から『年齢と生活自立』への直接効果は-0.24 となった。続いて『潜在変数』と「観測変数」のパス係数の特徴的な結果は、『年齢と生活自立』について「年齢」へは-0.60 となり、老研式活動能力指標の下位尺度である「手段的自立」、「知的能動性」への順に 0.92、0.73 となった。『「今、ここ」での「生きがい」対象』から「ボランティア活動」ならびに「学習や教養を高める活動」へは 0.85 となり、「社会への役割」へは 0.84、「自治会などの活動」へは 0.82 となり、「スポーツ・レクリエーション」へは 0.81、「蓄えた知識や技術」へは 0.79、「趣味の活動」へは 0.73 となった。『家族的な「生きがい」対象』について、「配偶者」へは-0.38、「子ども」へは 0.88 となり、「孫」へは 0.84、「孫の世話や家族との団らん」へは 0.60 となった。『伴う感情』については「主観的健康感」へは 0.73、「昨年と比較して元気か」へは 0.65、「人生を振り返って満足か」へは 0.53、「今の生活が幸せか」へは 0.52 となった。

全体

『年齢と生活自立』から『伴う感情』への直接効果は 0.44 となったが、『「今、ここ」での「生きがい」対象』を介して 0.13 という間接効果を与え、その総合効果は 0.57 となった。また、『「今、ここ」での「生きがい」対象』から『伴う感情』へは 0.28 という直接効果を与えた。一方、『家族的な「生きがい」対象』から『伴う感情』への直接効果は 0.04 となったが、『年齢と生活自立』を介して-0.09 の間接効果を与えて、その総合効果は-0.05 となった。そして『年齢と生活自立』から『「今、ここ」での「生きがい」対象』への直接効果は 0.46 となった。『家族的な「生きがい」対象』から『「今、ここ」での「生きがい」対象』への間接効果は-0.07 となった。また『家族的な「生きがい」対象』から「年齢と生活自立」への直接効果は-0.15 となった。続いて『潜在変数』と「観測変数」のパス係数の特徴的な結果は、『年齢と生活自立』について「年齢」へは-0.50 となり、老研式活動能力指標の下位尺度である「手段的自立」、「知的能動性」への順に 0.88、0.72 となった。『「今、ここ」での「生きがい」対象』から「ボランティア活動」へは 0.85 となり、「学習や教養を高める活動」へは 0.83、「自治会などの活動」へは 0.82 となり、「社会への役割」へは 0.79、「スポーツ・レクリエーション」へは 0.78、「蓄えた知識や技術」へは 0.74、「趣味の活動」へは 0.70 となった。『家族的な「生きがい」対象』について、「配偶者」へは-0.43、「子ども」へは 0.90 となり、「孫」へは 0.84、「孫の世話や家族との団らん」へは 0.63 となった。『伴う感情』については「主観的健康感」へは 0.70、「昨年と比較して元気か」へは 0.67、「今の生活が幸せか」へは 0.58、「人生を振り返って満足か」へは 0.57 となった。

考察

1. 「生きがい」の構造について

これまでの先行研究から高齢者の「生きがい」の関連要因として年齢¹⁹⁻²¹⁾、主観的健康感^{19,22,23)}、スポーツならびに趣味²⁴⁾、知的活動^{25,26)}、社会的役割²⁶⁾、子どもならびに孫^{26,27)}はPGCモラルスケール²⁸⁾など主観的幸福感⁷⁾と強い関連を持つことが報告されている。本研究においても、このような先行研究を支持する結果となった。

また心理・社会・医学データを用いて学際的な研究をした古谷野ら²⁹⁾によれば幸福な老いの指標として用いたモラル²⁸⁾、主観的健康感、社会活動性の間には相互に正の関連を認めていたという。本研究ではそれを支持しただけでなく、性別毎の特徴や具体的な内容の強さが示せた。つまり男性において『伴う感情』から「昨年と比べて元気か」や「今の生活が幸せか」というモラル²⁸⁾の側面への影響が、一方、女性において『伴う感情』から「主観的健康感」へ影響を与えていたことが明らかになった。

しかしながら本研究において男性は、『家族的な「生きがい」対象』から『年齢と生活自立』ならびに『伴う感情』への影響がほとんど認められなかった。農村地域において、女性は子どもならびに孫と「生きがい」の有無との間に正の関連を有していたが、男性は既婚の子どもとの同居に限っては負の関連を有していたという報告²⁶⁾もある。このことから男性は、家族を「生きがい」の対象とするよりも『「今、ここ」での「生きがい」対象』に比重をおきながら「生きがい」全体のバランスを保っている可能性がうかがえた。

本モデルの適合度については、CFI、IFI、NFIが0.867から0.896の値をとり、いずれも共分散構造分析で一般に適合度が高いとされる0.90^{16,18)}に近い値となった。また、RMSEAが0.034と0.05未満の値となり、これは妥当な値となった。これらのことから本モデルは、適合度が比較的高い結果が得られたと考えられた。

本モデルでは、『家族的な「生きがい」対象』へのパスについてモデルの構造上制限されているので、「生きがい」を高めることとなると、『「今、ここ」での「生きがい」対象』ならびに『伴う感情』を高めるということで論じざるを得ない。この場合(表3)、「生活自立」を維持もしくは高めることで、これらも高くなると考えられる。

例えば、潜在変数『年齢と生活自立』は、観測変数として「年齢」、「手段的自立」、「社会的役割」によって構成されていた。加齢は制御できないものの、「生きがい」を高めていくためには、「社会的役割」や「手段的自立」を高めていく必要性が示唆された。

また『「今、ここ」での「生きがい」対象』は、男女共通して「ボランティア活動」、「学習や教養を高める活動」、男性が「自治会等の活動」、女性が「社会の役割」から構成されていた。「伴う感情」については、男女に共通して「昨年と比較して元気か」への影響が大きく、男性において「今の生活が幸せか」へ、一方、女性が「主観的健康感」へ影響を与えていたことにも着目できる。

自治体や専門家が「生きがい」増進に関わっていく場合、孫や子どもといった家族と一緒に参加できる場所の提供やボランティアや自治会など社会と関わる機会の提供が「生きがい」増進につながる可能性が示唆された。

一方、「生きがい」増進のために高齢者個人ができることとして、学習や教養を高める活動など知的機能や手段的自立を維持すること、スポーツやレクリエーションを楽しむことが重要になってくるという情報提供をすることが大切であろう。

2. 今後の課題

本研究では、高齢者における「生きがい」そのものの構造を実証的に我が国で初めて示すことができたと言える。著者ら¹⁰⁾の「生きがい」構造モデルについて自己(主体)が基盤となった上での「生きがい」の対象や伴う感情への影響を男女差や各要素の強さについて実証的なデータで示せた。

しかしながら今後の研究課題として、大きく二つ示すことができる。第1に、本モデルでは男女、全体ともに『伴う感情』の重相関係数は0.40程度となり、このモデルで4割弱であるが『伴う感情』が説明出来たにすぎない。この値を高めるためには、伴う感情¹⁰⁾の要素に取り入れた研究成果、つまり近藤ら⁸⁾や鎌田ら⁹⁾が作成した生きがい感尺度と併せて「生きがい」調査することが大切であろう。また、面接調査を実施することにより「生きがい」に関する質問項目の回答率が留置法よりも向上することが期待され、いっそう質の高いデータを活用して量的な分析が期待できるであろう。

第2に、昨今の研究の潮流として evidence based という数値化、客観性が強調される実証研究の流れと、narrative based という「変動性」と「こころ」といった数値化が難しい主観的な「物語性」という側面を重視する流れという2つの流れがある。それを反映するように1999年5月の世界保健機構(World Health Organization:W.H.O.)における理事会で、W.H.O.による健康の定義に「dynamic(動的な;変動する)」だけでなく「spiritual(精神の,精神から成る,精神的な;霊的な;前向きな)」を追加することが提案され、その採択は保留されたものの、いずれ総合的・統合的な健康の定義の構築にも繋がる³⁰⁾と考えられる。「生きがい」は、これら2つの研究の流れを直に反映している。国内でも平成12年度(2000年4月)から10年間の計画で厚生労働省によって推進されている「健康日本21」の影響も受け、今後「生きがい」増進をねらった介入や実証研究の必要性が高まってくる可能性もある。そうなった場合「生きがい」には地域差^{23,26)}があることが報告されていることから、地域や自治体の特性にあった「生きがい」増進プログラムの開発ならびに提供³¹⁾が期待される。また様々な生き方を選択できるようになったことから、「生きがい」の構造分析を、世代別や地域別それに社会経済的な違いによっても明確にしていく調査研究が求められるであろう。

謝辞

なお本データは、佐賀県東与賀町との共同研究によって得られた。東与賀町の保健福祉課の職員ならびに住民のみなさんからご理解とご協力を賜りました。ここに記してみなさんに感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 柴田博：求められている高齢者像。(東京都老人総合研究所編).サクセスフル・エイジング；42-52，ワールドプランニング,東京(1998)。
- 2) 小林司：「生きがい」とは何か；自己実現へのみち。日本放送出版協会，東京(1989)。
- 3) 厚生統計協会(編)：国民の福祉の動向。厚生指標 臨時増刊；47(12)：203-206(2000)。
- 4) 神谷美恵子：「生きがいについて」。みすず書房，東京(1980)。
- 5) 前田大作，浅野仁，谷口和江：老人の主観的幸福感の研究；モラール・スケールによる測定を試み，社会老年学,11：15-31(1979)。
- 6) 古谷野亘：生きがいの測定；改訂PGCモラールスケールの分析,老年社会科学,3：83-95(1981)。
- 7) Larson,R.：Thirty Years of Research on the Subjective Well-Being of Older Americans,Journal of Gerontology：33：109-125(1978)。
- 8) 近藤勉，鎌田次郎：高齢者の生きがい感スケール(K-1式)の作成及び生きがい感の定義(その1)，老年社会科学，22：181(2000)。
- 9) 鎌田次郎，近藤勉：高齢者の生きがい感スケール(K-1式)の作成及び生きがい感の定義(その2)，老年社会科学，22：182(2000)。
- 10) 長谷川明弘，藤原佳典，星旦二：高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察；生きがい・幸福感との関連を中心に，総合都市研究，75：147-170(2001)。
- 11) 杉山善朗，竹川忠男，中村浩，ほか：老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本版PGMの作成(1)；尺度の信頼性および因子的妥当性の検討,老年社会科学,3：57-69(1981)。
- 12) 杉山善朗，竹川忠男，中村浩，ほか：老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本版PGMの作成(2)；実際の妥当性の検討,老年社会科学,3：70-82(1981)。
- 13) 古谷野亘：モラールスケール、生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性,老年社会科学,4:142-154(1982)。
- 14) 古谷野亘，柴田博，中里克治，ほか：地域老人における活動能力の測定；老研式活動能力指標の開発，日本公衆衛生雑誌，34：109-114(1987)。
- 15) 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫：原因をさぐる統計学；共分散構造分析入門，講談社，東京(1992)。
- 16) 山本嘉一郎・小野寺孝義(編)：Amosによる共分散構造分析と解析事例；第2版，ナカニシヤ出版，京都(2002)。

- 17) 田部井明美：SPSS完全活用法 共分散構造分析(Amos)によるアンケート処理，東京図書，東京(2001)。
- 18) 狩野裕・三浦麻子：AMOS,EQS,CALIS によるグラフィカル多変量解析；増補版，現代数学社，京都(2002)。
- 19) 前田大作：高齢者の”生活の質”；社会・行動科学的側面についての縦断的研究，社会老年学,28：3-18(1988)。
- 20) 杉山善朗，竹川忠男，佐藤蒙，ほか：向老期年代層(50歳～59歳)の「生きがい」意識に関する研究，老年社会科学,7：122-136(1985)。
- 21) 杉山善朗，竹川忠男，佐藤蒙，ほか：高齢就労者の「生きがい」意識に関する研究，社会老年学,23：44-51(1986)。
- 22) 古谷野亘：主観的幸福感の測定と要因分析；尺度の選択が要因分析に及ぼす影響について，社会老年学,20：59-64(1984)。
- 23) 藤田利治，大塚俊男，谷口幸一：老人の主観的幸福感とその関連要因，社会老年学,29：75-85(1989)。
- 24) 谷口幸一，大塚俊男，丸山晋，佐藤真一，松本真作：高齢者のパーソナリティに及ぼすライフ・イベントの影響，老年社会科学,4：111-128(1982)。
- 25) 吉田義昭，黒田基嗣，松本健治，畑伸弘，森岡郁晴，栗山佳朗，西村弘，武田眞太郎：高齢者の知的レベルに関連する諸要因の研究．日本衛生学雑誌，42(6)：1092-1100(1988)。
- 26) 長谷川明弘，藤原佳典，星旦二，新開省二：高齢者における「生きがい」の地域差；家族構成、生活機能ならびに身体状況との関連，日本老年医学会雑誌,40(4)：印刷中(2003)。
- 27) 吉田浩二，相田一郎，望月吉勝，福山裕三：健康な老人に対する死への準備教育，日本公衛誌,39(6)：355-360，(1992)。
- 28) Lawton,M.P.：The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale；A Revision,Journal of Gerontology：30,85-89(1975)。
- 29) 古谷野亘，柴田博，前田大作：幸福な老いの指標とその関連要因；心理・社会・医学データからの学際的研究，老年社会科学，6：186-196(1984)。
- 30) 臼田寛：WHO 憲章の健康定義が改正に至らなかった経緯，日本公衆衛生雑誌，47(12)：1013-1017(2000)。
- 31) 星旦二(編)：あなたのまちの健康づくり，新企画出版社，東京(2001)。